毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵税共五十錢）

編輯兼發行人　須田圭二
長野縣上田市
發行所　千曲會
上田蠶絲專門學校内
印刷所　信濃毎日新聞株式會社
長野市南町

山本三郎著
化學純絹絲の工業的完成　¥0.30
蠶絲科學研究會編
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其現況　¥1.50
菅原勇治著
改正蠶絲業法規要論　¥2.30
發行所　蠶絲科學研究會
長野縣上田市
（振替長野6413番）

世の視聽を集めつゝある
伊佐農林學校を訪ふの記（二）

教育方針――教育即生活の信條とともに本校で早く先鞭をつけたのが、今日叫ばれる「教室より圃場へ」のそれであつた即ち實踐農學がそれだ。數年前より如何にして之が徹底を期するかに隨分と苦心の跡が窺はれ、今や完成に近いまでに實習体驗による生活教育が行はれてゐる。即從來の傳統的な傳授武斷一的形式的説明用の農學、項目羅列式の農學を傳授するが如き教育の殻を脱して「農村生活訓練所」てふ意味に於ける教育の徹底を期してゐる。

從來の如くあゝするもんだ、斯ふするもんだと説明するのを省くと共に、實習を單に無駄働きに終らしめぬために農學と實習との不可分一体の教授と云ふ事に充分の研究をなして居る。即ち實習教材と實習講義とを相連續せしめ、カード式により鄉土に即した實習的實驗的指導に當つて、實習と學理との整理に當つて居る。農業關係の教科書を全部廢止して實踐農學を指導する許りでなく、病蟲害の如きも説明的教科書を廢して博物實驗の名目の下に週二時間一回宛、鄉土に生ずる是等の時期〳〵のものを教材として實驗用具を貸與して指導し、台灣の端から北海道の端までの病虫害の説明はして居らぬ。

訓育方面――學校の學習と訓練との基調をなす施設に勵文館、（圖書館）興農寮、（生徒宿泊所）とがある。更に振武館（武道場）も近々に出來るとの話。勵文、振武、興農の語は薩摩の生んだ偉人南州翁の「國の政治は武を振ひ文を勵み農を興すにあり」と云はれた語より出たものであると。彼等薩摩健兒の敬慕措く能はざる先生の遺訓をモットーとして、農村士官、農村志士の養成に精進されることは異常な教育効果をもたらすに違ひない。

同校の校訓たる

一、至誠公に報ぜよ。
一、勞働の神聖なる所以を悟れ。
一、自己の信念を確立せよ。
一、質實剛健の氣風を培へ。
一、醇美なる情操を養へ。

の五條を日常修練すると共に、教練の教練でなく教練の日常化とも稱すべく、軍事教官により又職員により軍隊的に訓練せられ實に生徒の訓練の徹底せるには一驚せざるを得ない。

軍人の軍隊手帳と同じく、各生徒は生徒手帳なるものを所持し、毎日の反省感謝の記事を記し、之れを日常ポッケットに修め、修養の材として居る。

勵文館教育――先般農業學校規定改正により本校は思ひ切つて授業時間を削減し教練武道体操實驗を加へて二十四時間とし、それに正課として一週一時間圖書館時間と云ふものを設け、無理矢理に生徒を圖書館に入れ參考書を繙かしめて居る學校、校友會の圖書を全部集め生徒の委員により自治的に貸出しを行ひ、自學研究をさして居る。前にも述べた如く本校は農業に關する一切の教科書を廢し實習により實踐農學の指導をなすと云ふものゝ鄉土に即した教材のみに限られ一般智識の向上や讀書力の欠陥を補ふため斷片的教科書を讀ませずに、此處に於て夫々斯界の權威者の著せる參考書により一定の問題を與へて研究せしめ、復命せしめて居る。是を一齊研究と稱して居る。從つて同種類の參考書が何册も用意し一組の生徒に不便なき樣にして居る。尚生徒を夫々趣味により分ちて養蠶の好きな者には養蠶を、林業の好きな者は林學を、畜産園藝と云ふ樣に好みに應じて夫々擔任教官より問題を與へて研究せしめ指導して居る。これを選擇研究と云つて居るこゝに初めて自由なる個性の伸展や、趣味による特殊研究が眞劍に生れてくることと思はれる。卒業してより何の役にも立たぬ教科書に、十數圓を消費せしむるよりはその金で將來迄相談相手となる良い參考書を教へ買く方が、如何程彼等を益し國家の經濟になるかも如れぬ。時間割の中に圖書館利用の時間を加へ、强制的に指導するのも卒業後參考書を繙き研究すると云ふ精神を涵養したいからである。農村の青年が讀書力のないのも斯ふ云ふ訓練を受けず、單に試驗用教科書により訓練されて來た余弊と云つてもよい。この勵文館は去る御大典記念事業の一として國本會（校友會）費の三分の二を天引き積み立て三ヶ年千五百圓を計上し自力で出來上つたもので、何かと言へば帳面を廻して他力に縋る輩の仕業と異つてゐるのもゆかしい。

自用時設定――週二日午後の課業を余然やめ、自用時と名づけ、各々歸宅して家業の手傳をなしたり、農事の暇の時には圖書館を利用して研究をなさしむる制度を設けて居る。勤もすれば一日六時間宛もつめこんで尙不足して七時間も學科を課して居る樣な舊來の方法では、生徒は自由に研究したり家業を手傳ふ樣な余祐を持たぬのである。まるで校内の中に生徒を入れて、やたらにつめ込むのと、經濟に最もよく立脚して然も肉身の親が親切に導くのとを較ぶれば、何れが教育的であるかは自ら判るであらう。今迄の教育は余りに學校に立てこもり過ぎたのである。然るに當校は思ひ切つて學校より家庭へと、實習を擴張したあたりは全く舊來の捉はれた學校教育より殻を脱して居る。週二回と日曜とを併せて三日間を自用時とし家業の手傳と、研究課題の深及と、授業料位を此の時間を利用して働き出さして居る。單に生徒を早く追ひ返して先生が樂になつたでは文部省の時間縮少も無意味になるので之れに依つて樂になつた先生の中三人を選び、此の先生は所謂學校での擔任時間は全廢又は二―四時間位に減少し其の余力を此の自由時の指導に當つて居られるのである。即ち此の三人の職員は週二回宛交代で、邪内の生徒の家庭を訪問し、生徒が自由時を如何に活用して居るかを視察し、或は指導して其の徹底を計つて居るのである。

興農寮生活――寄舍の側に四間四方の建物がある。此れを興農寮と云つて居る。寮舍には生徒八名、農夫職員合せて十名宿泊する。本校の實習組織は村落家族制度をとつてあるので各家族から生徒一名農夫職員各一名が一隅となつて「共同生活」を營むわけである。大仕掛な現代の教育、大量生産の現代教育――大衆教育では却々眞の農業生活を体驗する迄にはゆかないのである。此處に今日の學校教育の憾みの一つがある。そこでこれは少人數の學級即ち寺小屋私塾への還元であつて、先生と生徒とが共に働き共に習ひ共に生活する間に互の人格がぢかに觸れ合つて、教化の實修練の功を擧げようとするのである。一日のプログラムを聞くと、午前五時起床、家畜家禽の飼養管理掃除整頓、六時半迄眞劍な汗の勞働、終つて皇恩感謝、神佛祈願食事が營まれる八時から授業、午後は此の一隅は又特別のプログラムで働き、寄舍圃場、作業、工作、農場、各室の清潔戸締記帳を了へ、六時半入浴七時夕食、八時迄夕べの座談會開催。生徒は一週間交代、職員は一日交代なのださうだ。毎晩多種多樣な話題を通して面白い座談會に花が咲き、時の過ぎるのが惜しまれると。八時から九時半迄自習、九時半就寢。かくして興農寮生活の一週間はミッチリ農への体驗を積み、色々の土産話を持つて樂しき我が家へ。

兎に角此の生活によつて教室で教へられぬ處を細かに指導出來るので、作法から生活訓練迄先生の人格と生徒の人格とが、共然作用によつて磨かれ教育の尤も大切な午後四時から翌日の午前八時迄の時間を有意義に、指導出來る樣になつて居る。即ち興農寮教育は學校教育の綜合訓練所とも云ふ可き處である。

適位教育――と題して國漢科、英語科、數學科の三科目には生徒の境遇、個性に故に生徒は自用時であつて自由時でない事も面白い。誠に至れり盡せりである。

應じて部別教授をして、特に教材の多きを食らずその習熟を深め、實際生活に必要な教材を選び、その取扱を農村生活に則せんと期するものを第一部とし、從來の如く割合學問的取扱をなすものを第二部として教授して居る。三年卒業する時に一年の教科書の終りがまだ解釋出來ぬ樣な生徒を一週三時間宛机に坐らせて置く事は當人の御苦勞は勿論、國家の人物經濟から云つても誠に不得策と考へ、各性能に適しただけ收穫させて卒らせたい方便である。不消化でなく、充分消化出來るだけ消化せしめて卒らせたいのである。教材の取扱は例へば週三時間の數學があるならば一時間は全部一齊に集めて定理公理公式のみを進み、他の二時間は二班に分れ一部生はその復習、珠算實用數學を教はり、二部生はその間に澤山ある問題を行ひ、深く進んで行くのである。

体育時間――体育と云へば選手主義に陷るのが通弊である。殊に優勝校が農業精神の貧血病に苦しむ幾多の事實を識者は何と見るか。運動競技の優勝旗を持つ青年團には、大抵不良青年團が多く、特に農村を滅ぼす樣な者が多い。本校は全然体操時間を特設せず、毎時間の休みが五分で二時限と三時限の間に二十五分の運動時間を置き、實習組單位で職員も之に伍して一趣味的、團体的の運動を適宜取り交ぜて之が利用に努めてゐる。故に一週体操教員によつて一時間宛指導される學校より、本校は二時間も多くの体操を課して居る事となる。然も体操教員を雇はず、全職員が体操の教員として指導し折角軍事教官により築き上げられた訓練を体操教員に依つて崩されぬ樣に考へて居る點など誠に妙味ありと云ふべし。此の時間にて生徒は心氣轉換、學習効果の增進、學校生活の樂しみ、体育の日常化民衆化を欲し各個性に相應の体育向上を目標にして進んでゐる。

早起訓練――毎週木曜日には一時間早目に始業、早朝清新な氣分の中に全校職員生徒を擧げて校の内外の美化作業を奉仕的に行ひ、朝起きの習慣と學校の美化に努めて居る。冬でも七時半より遲くはならぬ由。一体農人に必要な資格は朝早く起きて朝食前に一仕事しなければ氣がすまん樣な心持の人でなければならぬ。郷にはまつた樣に午前八時から午後四時迄では駄目である。

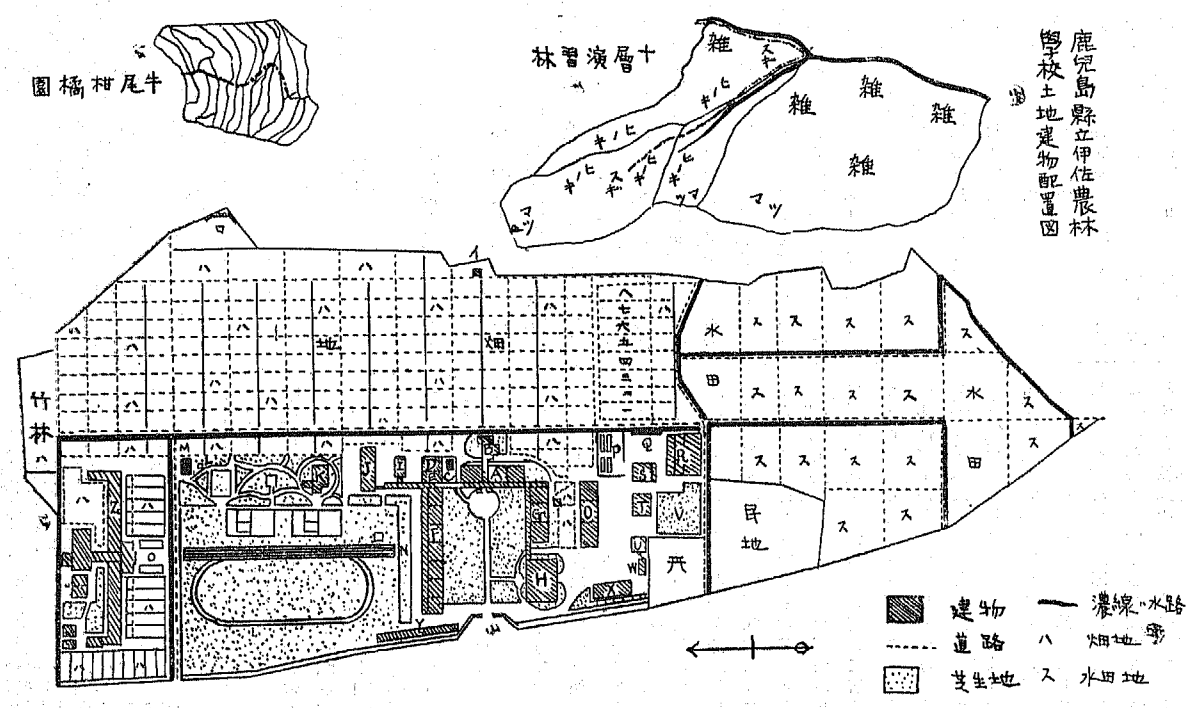
考査制度――文部省が試驗廢止を行つたそれ以前に、既に當校は試驗を廢止して居つた。勿論學期試驗もなければ學年試驗もない。然し時折り考査をして見て先生は教へた事が如何に生徒に理解され、徹底して居るかを反省する機會を作る必要がある。そこで當校は授業五時間毎に一回宛必ず、五分――十分位で書ける簡單な問題を課し、考査する事になつて居る。五時間と云ふと二三週間に一度位宛各科目がある譯である。日に二ツ位ある日もある。週四――六科目位あるのが普通である。試驗を廢止して反つて多くなつた形である、然し生徒は五時間に一回宛だから範圍が少いので良い成績を得られるから反つて喜んで居る。一体考査は教師の反省材料で生徒を苦しめる機會ではない。又生徒の氣憶力の大小を計る機會でもない。毎日習つた事を整理して行く方便に課するものであるから、六ケ敷い問題を出したり、或は一時間もつぶす樣な澤山な問題を課するには及ばない、少し宛何回もやる方が生徒の爲めで、當校では一人に付一ケ年に二百回は降らぬ由で先生も忙しい上に此の答案には閉口されて居る。教員を始めて一二年の中は此の試驗をする位面白いものはないが、四五年以上になると一番難なのは此の答案調べである。

そこで校長より反省の資料に、或は學力をつけるために成る可く多く考査を課する樣に命令があつても、ズルイのになると仲々やらぬ樣である。一學期に二回もやれば上出來で、ひどいのになると一回位で胡麻化すのも居る。そして一回に澤山の頁をやられるから氣憶力の悪い子供は零點を採つて心配しなければならぬ。誠に氣の毒である。先生の隋けが生徒へ當る事となる。然るに本校の樣なればどんな出來ない生徒でも範圍が少いから必ず僅かは知つて居る。又一回や二回でなくて一學期中に七八十回もあるのだから、取り返しもつけば眞にその生徒の實力も現はして來る。そして此の嫌な考査は職員が背水の陣を敗かねば實行出來ぬから、豫め教務主任から毎週土曜日に次の週の授業第六時間目の學科目を報知し置くと、先生は忘れても生徒は考査が恐ろしいから必ず勉强して來て準備して居るから、先生は生徒に强ひられて考査を行ふ樣になるのである。答案は教務へ出し父兄會の折り之れを父兄の觀覽に供するのである。

學習ノートの制定――當校は筆記用に大學ノートを使はせぬ。學校の消費組合で一定の形式のノート用紙を印刷して、一錢に五枚の割で販賣して居る。そして各學科目の擔任はその科目に對して此のノート紙を使用する方法を教へ、全科目とも此のノート紙を割一的に使用せしめて居る。此の紙を設けた理由はノート用紙の最後の頁迄使はせる主旨である。

學生時代は直きにあき易くて新しいものゝ〳〵と使用し、ひどいのになると一冊のノートの三分の一も使はずに放つてしまうものが多い。少くとも終り五分の一位は皆殘る樣である。今假りに一人が一年に十冊ノートを使用し此の中五分の一宛殘したとせば一ケ年間に二冊宛無駄にした事になる。一冊十錢としても二十錢宛棄てた事になる。全國學生三十萬人とせば年に六萬圓の無駄をして居る事となり、長い學生生活中には大變の金額になるのである。そして金錢の損失の外にあき易い悪癖を養ひ、最後の一頁迄我張る氣力を失してしまうなど誠に困つたものである。當校は此處に鑑みる處ありて各

鹿兒島縣立伊佐農林學校土地建物配置圖說明



一　第一組農場
二　第二組農場
三　第三組農場
四　第四組農場
五　第五組農場
六　第六組農場
七　第七組農場
八　第八組農場

A　本館
B　小使室
C　養魚池
D　藤棚
E　兵器庫
F　普通教室
G　特別教室
H　講堂

I　便所
J　養蜂室
K　圖書館
L　電動室
M　プール

N　植物園
O　農場教室
P　温床
Q　洗場
R　鶏舎
S　豚舎

T　堆肥舎
U　畜舎
V　興農寮
W　牧場
X　車庫

Y　農具舎
Z　自轉車置場
イ　燒却場
ロ　射的場

科目の間には赤の仕切り紙を挿しはさみ一册の表紙により綴じられて居る。

寄宿舍忠元園――本校の經營は何れも特徴を持つて居るが就中寄宿舍忠元園の經營は又以て感心せざるを得ない。大部世間で評判して居り、皆驚嘆の眼を以て見て居る樣である。今其の大樣を書いて見よう。本校の寄宿舍は用地約七〇アールありて、其の中約九アールの建物を除き、其の殘余は全部寄宿舍專屬農場として、蔬菜園、桑園、花園、茶園に耕作し、又溫室二五、豚舍一〇、堆肥舍二〇、鷄舍二〇平方米、溫床五枠を設置して舍生が獨立經濟の下に耕作勞働し、依つて得たる利益金により食費の輕減を計つて居る。尙舍近くの民有地約二〇アールを小作し、蔬菜の栽培を行ひ自給自足を計つて居る。

斯くした設備を有する當校寄宿舍全体を「忠元園」と呼んで一つの村邑と見做し、其の中に七―八人が一家族となつて本縣著名の山岳名を家名として生活をなす樣な風に仕組んである。「忠元」と云ふのは鄕土崇敬の英雄新納武藏守忠元公の偉大なる人格を慕ひ、字義としても我國國民道德の大本を意味する樣に取り、家名は自然の質實雄大なる壯麗美を心に描かしめて敎養させたい爲めである由。

寄宿舍を斯んな風にして生徒を收容するのは單に自宅が遠くて通學が出來ぬからと云ふ從來の下宿屋的寄宿舍や、又往々有り勝ちな學習だけを專念せしむると云ふ爲でなくて、眞に活きた農村生活訓練によつて、圓滿なる全人敎育を完ふせんが爲であるから、每日營々として各家に分屬せられたる農場で家長たる三年生を中心として二年生、一年生の家族員は共に愉快に働き、花、野菜、蘭、漬物、鷄、豚等の生產をあげ食費の一部とし或は面白く休養娛樂を俱にするための費用にあてるなど、所謂自活しながら學習すること即ち生活即敎育の目標の下に修養し農業生活を通して農學を体驗せしめ、且つ生徒は生活の必要に應じて自ら研究工夫せしめ、併て農民道の精神を体得し喜んで勞働に耐へる精神と体力とを持つ農士を養成し、克く學び克く遊び「土の生活」の愉快妙味を味はゝせる樣努力されて居る。

又自治訓練と云ふ意味から園長、家長係長等を設け忠元園全体を一村に擬し、園長は村長、家長は戶主に擬し、別に購買組合、衛生組合、郵便局、新聞取扱所本屋、菓子屋、理髮屋、運動具店、雜貨店、炊事勤務等を設け各家に之れを配當分擔せしめ、以て公民訓練の一助となし又早朝起床後、夫々各家に社會奉仕的作業として一齊に各室は勿論食堂、浴場、洗面場、休養室、倶樂部、閱覽室、便所庭園、溫室、豚舍、堆肥舍、鷄舍の掃除美化を行ひ、小使給仕の如きは雇傭せずして皆自分等の事は自分等で協力して一切を行ひ、言はずして自力更生を計つて居る。此の頃は每日二名宛の交代で炊事勤務者を出し茶腕洗ひから、大根人參を洗つたり、切つたり、飯炊きまで行つて居る。

目下在舍生七十七人で一ケ月の學費十二圓で充分の由。設備もなか〳〵よく日本間で軸や額をかけたり、生花を生けて情趣も多分に具へてゐる。農學校の生徒は働く時はどんな汚い仕事もするが、一度手足を洗つて家に入つたならば、奇麗な室に住み所謂「汚く働いて淸く住む」のモットーに生きねばならぬ。

自營組合――最近目新らしく孤々の聲をあげたものに自營組合なるものがある。之は卒業生指導の一面である。本校は創立二十年に垂んとして六百名の卒業生を出してゐる。多くは農村の中堅として働いてゐる。然しその活動が從來個人的であるために、活動の効果を十分にあげることは出來なかつたから、心あるものは何とかして大同團結して進みたいものと の感を抱いてゐたそうだが、時も時世界大阪の富民協會へ出品したら銀牌を受領した。此處で目下之がれ大量生產を計劃し、間もなく全國に賣り出されるであらう。名も「更生の素」とは喬つて居る。

むすび――設備は武器で今頃の戰爭に滅多に白兵戰も出來ないからには之が充實もよそには出來ないが結局は人の問題である。その人を得ざれば空し。偉大でない迄も僞はらざる熱烈な中心人物の許に、一致協力意氣と熱で職く燃え固く結びつき、敎育の理想へ向つて精進努力する、學校を擧げての氣分がやがて學校をよくし、鄕土をよくし、國家をよくして行くのだ。伊佐農林校よ彌が上にも榮えよ。職員各位よ益々健在なれ。

附記　同校には養蠶科第六回の櫻井君が居られるから詳細な事は同君に照會されるがよからう。（編輯子）

來ル三月十五日午前十時三十分ヨリ本校内ニ於テ第二十回卒業證書授與式擧行致候ニ付御出席相成度御案内ニ換ヘ茲ニ謹告候也

追而御臨席ノ時ハ其旨三月八日迄ニ御回答被下度候

昭和八年二月十五日

上田蠶絲專門學校

千曲會員各位

千曲會第六回代議員會議事

會期昭和七年十一月廿三日午後一時

會場　母校講堂

會次第

一　開　會
二　事業報告
三　議長選擧
四　議　事
五　役員補缺選擧
六　閉　會

一、開　會

針塚名譽會長既報の如き挨拶をなし松村理事長開會を宣す。

二、事業報告

各所管理事大要次の如き事業報告をなす

一、昨年度事業費目中研究奬勵金の交付は一定の規程を設け委員を擧げ詮衡するに非ればに取扱ひ上不便なるにより實行を延期し今回之が提案をなせり。

一、昨年度丹綾會の提案にかゝる會費遞減問題に關しては愼重研究の結果本會々則を左の如く改正し夫々御手許に配布せり。即ち

第九條　本會々員ハ左記各項ノ一ニヨリ會費ヲ納入スベシ

一、一時金五拾圓

二、拾七年間每年金四圓以後一時金貳拾圓

三、貳拾五年間每年金四圓

而して此の三項は郵便利子を基準として採算すれば略同一率となるものなり。

一、支會の區域變更せるもの左の如し。

㈠三重千曲會＝東海千曲會より分離獨立

㈡栃木縣＝兩毛千曲會より分離し東京千曲會に合流す

㈢群馬千曲會＝兩毛千曲會の改稱

一、千曲時報を年十二回發行し學術雜誌は既に二回發行す。

三、議長選擧

理事長議長選擧を諮かる。理事長指名の動議成立し仍て理事長は北信千曲會、代議員岸勝彌氏を指名す。

岸代議員議長席に就き一場の挨拶をなし且つ出席者全員に發言の自由を求め其の協賛を經て議事に入る。

四、議　事

一、本會發行ノ蠶絲學雜誌半部數ハ母校印刷費ニテ購入配布セラレタキ件

（山陰千曲會）

本件は半部數には充たざれ共百部余學校の經費に於て購入し各研究機關學校等に寄贈しつゝあれば既に提案の趣旨に添えるものとして可決。

一、本支會間ノ連絡ニ對スル施設改善ニ關スル件　（熊本千曲會）

見波氏問題を解說し「具体的方法として專任事務取扱者を常置し本支會の連絡をより圓滑ならしめ進んで就職斡旋に至る迄行はしめん」ことを提唱す。而して此の問題は從前屢々論ぜられたる所なる

が第一に經費の點第二に人事を三科兼ね行ふことを得ざる實狀により未だ實現の域に至らず。今回も亦種々議論出でたるが結局學校よりも援助を乞ひ成可く早く實現を期すべきことを理事者に一任せらる。

一、二十五周年記念事業ニ關スル件

（山形千曲會）

一、母校創立二十五周年記念祝賀式擧行ニ關スル件　（北信千曲會）

以上二案は同一趣旨の出題に付き議長は一括附議し山形は今井氏北信は飯島氏夫々説明をなす。二十周年を中止したる今日なれば何人も其の趣旨には異論なしたゞ其の方法と之に要する金額並に出資の形式等には相當議論ありたるが二十五周年には猶三ケ年の日子を有し此の間に於ける經濟界の動向等によりて事業を斟酌する必要もあれば明年度代議員會迄延期し本會支會共更に研究を重ねて愼重に着手することに決す。

一、同窓會入會金減額ノ件

一、同窓會費減額ノ件　（神奈川千曲會）

以上二題に對し飯島直氏説明をなし同窓會の事業を阻止せざる程度に於て兩者共減額せんことを提案す。林理事會費の内容を次の如く説明す『入會金を二十圓となせしは三年以前なり、現在同窓會の資産は三萬三千圓ありて一人當り三十圓余となる。此の資産は先輩諸氏が大正十年より粒々辛苦して積み立てたるものなり、然るに現則二十圓にても一人當りの資産は漸次低下するものなるに之より減額する時は一層對個人の資産を少なからしむるのみならず會員相互の公平をも失せずや、次に同窓會費は現在四圓なるが其の二割は支會に返還し又他の二割は基金として積み立つるが故に本會の經常費として使用するは約半額なり。會費としては決して多しと云ふべからず。支會の返還金も効果的に活動せるやに聞き及ぶ基金の積立ても怠る可からず。特に本年より制定せし會費の年限制（前記第九條）は更に經常費の不足を來さしむるおそれ無しとせず。現狀如斯なれば理事者とし之以上の減額は苦痛なり』

此の提案に附隨し豫算の内容、收金率等に對し質問あり。當該理事之に應ふ。而して本會は可成く經費の低下に留意すべき希望を附し此二項否決さる。

一、準會員ノ制度ヲ設クル件　（本會）

昨年度新に教婦養成科の設置を見明春三月第一回卒業生を出さんとす。此の機會に於て同科卒業生並に之に準ずる教婦に對しては本會々則中に附則を設け準會員として取扱ひたき旨提案の説明あり原案通り可決す。

一、昭和八年度本會經費豫算案並ニ特別會計ニ關スル件　（本會）

林理事別掲豫算書（紙面の都合にて三月號に發表すべし）に基き説明をなす。特に新規なる事業なし之に對し、二三質疑ありて後確定す。

一、役員補缺選擧ノ件　（本會）

松村理事長本案の説明をなし高木理事は横濱に轉任せられ森山理事は病氣のため何れも辞職申し出でありしが實に事情已むを得ざるものとし之を認め之が補缺選擧を行ふ旨を陳べ其の方法を諮かる。山陽小川氏の發意により議長指名の動議成立す。議長は最後に次の二名を指名す

母校製絲部勤務　小林茂雄氏

同　紡績部勤務　野口新太郎氏

一、蠶絲學雜誌購讀者數增加方法ニ關スル件

浦生理事「本誌の發行に就いては昨年度代議員會に於いて會員中希望者のみに配布收金し不足額を本會の補助に求むることゝなれり。七年に於ては葉書、時報等を以て購讀者を募集し六百二十八人の申込みを得たれば之を基準として印刷に附せり。然るに事實は四百二十余名のみの拂込みなりしため忽ち二百八十圓の欠損を生ぜり。かゝる狀態にては印刷豫定部數の決定困難なるのみならず經費も豫定と甚しく相違あるに至る。加之購讀會員も漸次減少の傾向を示し前途憂心に堪えず。本誌の斯界に於ける聲價は單なる渺たる一雜誌に止まらず學校を代表すべき機關としてあまねく職者の知る所なり故に此の品位を傷くることなく他迄繼續致し度し。會員數を增加すべき名案あらば承はり度し」と説明をなす。之に對し雜誌の内容難解に過ぐ一層實際化せしむべしと云ふ議論多ければ更に其の内容の説明を進む「雜誌の内容は二號前より改正し次の四項に分つ、報文、調査、資料、抄錄と、報文は學術的報告を主とするものにして之に歐文の抄錄を附す、調査、資料は專ら實用的なる調査研究を登載し之には歐文の抄錄を附せず、抄錄は主として歐文に限り登載し縱横兩軸に忠ならんことに腐心せり」と現在の方針を説明せり。而して今直に具体的に實施すべき名案も無きため各支會に於て可成的多數購讀するやう勸誘し本會に於ても編輯委員の研究を俟つて明年度更に研究を繼續することに決す。

一、昭和六年度收支決算書の認定並に剩余金處分案　（千曲會）

林理事「昭和六年度本會決算に對しては會則第三十七條に據り已に監事の監査を經たれば御承認を願ひ度し。次に決算の結果生じたる剩余金は別紙の如く千二圓八十九錢となれり。此の剩余金を會則第二十五條によりて左の如く處分せんとす御協賛を乞ふ。

金五百圓　準備金

金五百貳圓八十九錢　翌年度繰越金

異議なく可決す。

一、資産管理規程　研究奬勵規程案

倉澤理事兩規程を一讀し簡單に説明をなす。之に對し一二質疑の後可決す。

一、蠶絲經營科設置促進方當局ニ建言スルノ件　（東京千曲會）

一、蠶業教育ヲ一層適切ナラシムヘキ施設ヲ講ゼラルルヤウ母校ニ建言スルノ件　（山形千曲會）

議長は建言一束として此の二件を附議す。之に對し提案者は次の如く説明す。即ち「蠶絲經營科は他の同種の學校に於ても新設せられんとする由なれば母校に於ても同時に設置せらるゝやう配意を乞ふものなり。蓋し現下の蠶絲業界は技術的研究方面より蠶絲業經濟及び經營方面に超スピードを以て局面展開をなしつゝあれば母校に於てもかゝる方面に一層の力を致されんことを希望す。又新卒業生を部下に迎ふる場合基礎的學科には相當通曉すれ共當面の實際には稍々疎きに過ぐる感ありと思惟す。より多く即現實的教育を施すの要無きや敢て當局の一考を乞ふ次第なり」議長は此の二案に對し其の趣旨に添ふやう理事者より適時學校當局に御依頼するにとゞめては如何と議場にはかり一同賛成する所となり決定す。

一、滿洲國ニ蠶業調査員派遣ニ關スル件

（山形千曲會）

本件を議題とする以前滿洲千曲會長湯川氏滿洲事情に關し一場の講演をなす。尙湯川氏の意見として「早川教授は本件に多大の興味を有し實地之を調査されれば同教授の歸校後相談され母校として研究する方上乘の策ならん」と陳ぶ。尙早川教授に御依頼して千曲時報に御寄稿を乞ふ希望等も出でたり。何れにしても必要且つ適切の問題なれ共多大なる經費關係も之に附隨すべきが故に議長は幹部一任説を提示し可決す。

以上諸問題を討議し終り議長一場の挨拶をなし降壇す。

六、閉會

松村理事長長時間熱心なる討議を議長並に會員に謝し得たる成案は誠心誠意實行せんことを誓ひ閉會を宣す。

資産管理規

第一條　本會ノ資産種目左ノ如シ

一、基本金

二、別途積立金

三、海外留學費金

四、研究奬勵費金

五、準備金

六、通常會計ニ屬スル資金

第二條　通常會計ニ屬スル資産ノ管理ハ左ノ方法ニ依ル

一、公債

二、金錢信托

三、銀行預金

但シ金錢信托ハ三菱信托株式會社トシ銀行預金ハ株式會社安田銀行及第八十二銀行ヲ其取引銀行トス

第三條　通常會計ニ屬スル資金ハ現金及振替郵便貯金並ニ當座預金トス其取引銀行モ亦株式會社安田銀行及第八十二銀行トス

第四條　前各條ノ管理方法ハ理事會ノ決議ヲ經ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

第五條　會計理事ハ理事長ノ委任ヲ受ケテ資産ヲ管理スルコトヲ得

附　則

本規程ハ昭和七年度ヨリ之ヲ施行ス

研究奬勵規程

第一條　蠶絲業ノ進歩發達ニ關シ特ニ重要ナル研究又ハ發明發見ヲ爲シツツアル會員ニ對シテハ審査員會ノ議決ニ依リ奬勵金ノ交付ヲ爲スコトヲ得

第二條　支會長ハ其ノ區域内ニ於テ本規程ニ依リ奬勵金ノ交付ヲ受クヘキモノアリト認メタルトキハ毎年九月末日迄ニ其ノ事由ヲ詳記シ理事長ニ申告スルモノトス

第三條　支會長ヨリ奬勵金交付ノ申告アリタルトキハ理事長ハ審査員會ヲ開催シ審議決定ス

第四條　審査員會ノ部門並ニ員數ヲ左ノ如ク定ム

蠶業部　若干名

繭業部　若干名

蠶業部ニ於テハ養蠶ニ關シ

繭絲部ニ於テハ製絲紡績及人造絹絲ニ關スル研究又ハ發明發見事項ニ就キ審議ス

第五條　審査員ハ毎年理事會ニ於テ會員及ビ贊助員中ヨリ之ヲ推薦ス
第六條　奬勵金ノ交付ヲ受ケタルモノハ研究ノ完了次第其ノ業績ヲ本會ニ報告スヘシ

附　則

本規程ハ昭和七年度ヨリ之ヲ施行ス

以上

抽象的論議第二稿

蕉

3、誰が一番日本のためを思つて居たか？

一九三一年初冬の滿洲事變の突發を境として、更に一九三二年晩春の某事件を契機としてのファッショ的傾向に對しては何人も異論は有るまいと思ふ。たゞ問題は斯の如き急激なる變轉の動因が何處に胚胎したかにある。

吾々は普選によつてデモクラシイ的政治の確立された事を教へられ憲政々治の常道確立を吹き込まれた。但しこれは政權獲得を以つて唯一の政治家的行動の目標として居る連中にだ。

然り、政黨政治家の殆んど全ては政治家的行動の目標を忘れて居たのだ。農本國、日本の產業政策上から見れば殆んど第一義的重要性を保持するかに見ゆる所謂肥料政策問題にしてからがアル變態政治家の失言に始りたるが如きは笑へない好個の一例だ。

斯くの如き觀點を度外視しては多年の懸案によつて確立された(形式的にして)憲政治下に於て吾々は斯くの如き急激なるファッショ的轉向の動向を理解する事は出來ない。

滿洲事變以來の政治的、外交的指導原理か何處から生れて居るかは云はずして明かだ。何が故に斯くの如く現時の問題に對して政治家(所謂)が無能振りを發揮するのか？

自分は政治家が政治の目標を忘れたからだと思ふ。國民のための政治が考へられて居なかつた。乃至は他の第二義以下の目的のために影を奪はれて居つたからだと思ふ。

先づ自分は不思議に思ふ。

渡滿以來滿五ケ年、その間滿洲視察と銘打つて(新聞紙は斯く傳へて居る)往來した大小政客の數は數十指に余るにも拘らず滿洲の產業に對しては如何に省る事の尠かつたかを、これを具體的に云へば滿洲に於て農業開發の問題は最も重要な一部門たるべきにも拘らず例へば農事試驗場の如きを視察した政客、代議士の如何に尠きか、否絕無に近き事これである自分の記憶に從へば山崎延吉代議士一人である。

議論の出發を此處に置くのは余りに偏見的だと云ふかも知れぬ。然しこの觀方は偏見的ではあつても事實を誤まつては居ない。試みに大連、奉天、長春、撫順に行つて彼等の行動を聞いて見る。

「要するに待合に這入り込んで利權を漁つて歸るだけだよ。」と云ふ。

昨今、內地より來る友人に聞いて見ると所謂政談演說會に於いて滿洲の事を喋らぬ代議士は無いと云ふ、そして一樣に滿蒙は日本の生命線なる所以を强調すると云ふ。然し、彼等が如何に卓を叩いて高言しようが彼等の滿蒙視察中にこの日本の生命線なる所以を悟つたのでない事は明だ。尠くとも彼等の滿洲に於ける行動に對しては在滿邦人は一人だつて信用をおかない。

更に一つ不思議に思ふ事がある。

農事試驗場備付の參觀者芳名錄に如何に軍人の名士が多いかと云ふ事である。

故、白川大將、もその一人だ。本庄將軍もそうである。山本英輔大將其他の名も見える。その他、佐官級を入れゝば枚擧に遑ない位である。

而もこの中で海軍の將星の見えたのは聯合艦隊等の旅順、大連の二、三日の假泊中に訪問されたもの、それも往復の乘車時間九時間を費しての他に途中何等の目的を含まざる農事視察である。

斯くの如きを如何に判斷するか？この事を不思議だと考へる自分の頭は斷じて偏見に滿ちて居る譯でない。

何かの示唆がある。現時の政治的、外交的指導原理の生れ來る方向、某方面に對してある種の大衆的感激を覺ゆるもこのためだ。よしこれが再轉して如何なる方向に進展するかは別問題としてもだ。

ファッショ轉向の動向の急激だつた理由は此處に於て明だ。それは柳條溝の爆藥によるのでもなければ、五月十五日のブローニングにでもない。

「誰が一番日本のためを思つてたか？」

答は此處から始められねばならぬ。

東北の冬をゆく

碓氷　茂

東北。それは僕にとつては殆んど未知の世界である。その未知の世界の冬の旅をした。十二月十八日から二十八日迄。

山形——秋田——青森——岩手——宮城。

×　×

これらは何れも雪の多い國々である。「その雪の多い國の姿がどんなであらう」とは常々僕の頭を去らなかつた好奇心である。

×　×

十二月十八日の夜(一九三二)上野を立つた。米澤あたりは大變な雪、雪の中から桑園が見える。いはゆる「立通し」桑園といふのだらう。山形へは七時頃着いた。女學生が釣鐘マントに包まれて白い息をはきながら凍つた山形市の大通りを小きざみにカラコロ歩いてゐた。

×　×

山形の縣廳は最新式の立派な立物である。どこの縣へ行つても縣廳といへば妙に堂々たる體軀をしてゐるが、こゝも縣廳は立派である。縣廳では古山技師、井上兵一郎氏に逢つてこの縣の蠶の話を聞く話によれば米澤から山形地方へかけて山へ近い地方が養蠶が盛んで、海に近い莊內地方は專ら米の產出に多忙であるといふことである。

×　×

ここは秋田。秋田は雨だ。ゴムの長靴を穿いた女人が通る。子を負つた女。山から出て來たと思はれる女。物を賣りに來たらしい女。みんな長靴だ。それから又女學生もゴムの長靴だ。實にゴム長に惠まれてゐるものは東北の女である。雪の國の女である。このゴム長靴の文化の輸入されるまでは、これら北國の女性は冬になるとどんなに惱まされ續けたであらうと、つくづく思ふ。秋田の街を通ると、ゴム長へ美しい顏をのつけた女性が澤山通る。

×　×

勿論ゴム長文化の惠を受けてゐるものは單に、この地方の女性のみに限られてはゐない。男性と雖もその惠を受けてゐることは勿論である。といふのはゴム長靴を穿いた男が多いからだ。

×　×

それがためであらう。秋田市の店頭にはゴム長が澤山並んでゐる。

×　×

秋田の縣廳は「雪よけ風よけ」で馬が目隱しをしてゐる樣な姿だ。それが冬の東北へ來たものには一種異樣の感を與へる。

縣廳の山下忠雄君が縣農會まで僕を迎へに來て吳れた。農務課には奧田さんがドツシリ腰を下して事務を執つてゐられた。「ミですが」と名刺を出さうとすると「僕は知つてゐるよ」といはれた。さういはれると同時に僕は急にいふに言はれぬ親しさを感じた。ここでは又高橋武雄氏や白井君から溫かい歡迎を受けた。山下君に連れられて社會教育主事の堀口宣治先生に逢ふ。中等學校の頃教へを受けたまゝで、お別れしてから十四、五年目である。

「ヤア來たな」

と例の丸こい顏で、眼鏡越しに喜んで下さつた。その顏は敎へを受けてゐた頃とちつとも變つてゐない。小生のための宴會へは上記人々の外に石川忠一郞先生がワザワザ來て下さつた。恐縮の至りである。初めての土地で、恩師や知人に會ふほど嬉しい思ひをすることはない。

×　×

青森では雪だつた。夜の十時半頃下車したら、宿引きにきたない宿へ引つ張り込まれて了つた。それでも宿料が安いに相違ないと思つたから文句を言はなかつた。表へ面した寒い部屋で、足袋を穿きながら寢た。さうしないと寒さが這ひ込んで來て眠れないからだ。宿の女中の話によるとこの邊の宿では隨分インチキが行はれるとのことだつた。

×　×

もし冬の青森でなくて、春から夏へかけての青森だつたら、海を越えて北海道へ渡つて見たくて仕方がなかつたに相違ない。何故かといふと、北海道なるものに猛烈な憧憬を持つてゐる僕だからである。

×　×

青森の縣廳では京都時代の友人草島君に逢ふ。君は蠶絲課長菅原さんの所へ僕を連れて行つて吳れた。菅原課長には、東京で時々お逢ひしてゐたにはゐたが、ゆつくり面と向つてお話を覗ふのは始めてだつた。間もなく、課長の電話で、蠶業試驗場長の小林さんが見えた(用事で青森へ來てゐられた)。菅原課長、小林場

長、泉技師、それから草島君は旅の男のためにわざわざ席を暖めて下さつた。雪降る青森、そこにこのやうな歡待が待ち受けてゐようとは夢にも思はなかつたことだ。

×　×

青森の街中を橇が走つてゐた。凍つた街を馬が曳いてゐた。雪の國ならでは見られぬ風景である。モンペイを穿いた女が通る。市がたつてゐるところへ來たら、美しい若い女が、顔を眞赤にして魚を買つてゐた。こんなに寒くてもよく買物に出て來たものだと僕は思つた。

×　×

草島君の下宿で青森のリンゴをむいて食つた。降る雪の音を聞きながら。

汽車では小林場長と一緒だつた。青森へ行つたら必ず宿つて來いといはれた淺蟲へは遂ひ宿るチャンスを與へられなかつた。

×　×

その晩十一時頃盛岡へ着いた。盛岡へ着いて見ると、もう雪の氣はなかつた。その代り寒さは青森に負けずきびしかつた。ここでも宿曳きに引つ張られて、停車場附近へ宿つて了つた。そしてここでも足袋を穿いて蒲團の中へもぐり込んだ頭からスッポリ外套を引かぶつたまゝ。そして女中の手が霜燒けだらけになつてゐるから隨分ここも寒いだらう、などと想像して見た。

×　×

東北と聞けば、是非一度行つて見たいと考へてゐたのが盛岡だ。「その中學校へは嘗て石川啄木が通つてゐたことがある筈だ。」そんなことを考へたがためでもあらう、僕が盛岡へ行つて見たいと思つた動機は。然し冬の盛岡は殺風景で仕方がなかつた。

×　×

岩手の縣農會へ、僕に逢ふために、安田・澤川の兩君がワザワザやつて來て與れた。言葉のわからない冬の東北へ來てわかつた言葉で君等と話したら、京都時代の兩君に逢つたやうな氣がした。

×　×

それから仙台へ。仙台へ着いたのは夜の七時頃だつた。一番にぎやかな通りへ出たら「年の市」で大賑ひだつた。土産にと思つて埋れ木細工を買つたはいゝが、それを抱いて翌日長いこと調査のため田舍を歩かせられたのには閉口した。こんなことなら、そんなものを買はなければよかつたと思つた。その晩縣廳の近くの宿屋へ宿つたら馬鹿に安かつた。朝見たら下宿屋兼宿屋だつた。待遇も相當よかつた。それから正月に年始狀まで寄こしたのもこの宿屋である。その後僕は旅をするなら斯うした宿を選ぶに限ると考へてゐる次第だ。

×　×

次の日宮城縣農會の及川技師に連れられて、加美郡の中新田驛で下車して色麻村といふところへ行つて、自給肥料を大々的にやつておる農家を見せて貰つた。一年間に數萬貫の堆肥を作つて十餘町歩の田畑を耕してゐるのだ。大したものだ。その晩中新田で宿つて、翌日栗原郡へ向つた。築舘から志波姬村、それから若柳村と自給肥料の實際を尋ね廻つたのであつた。

さうして十二月の二十八日といふ年の暮に東京へと歸つて來たのである。東北といふ未知の冬の世界を胸に秘めて歸つて來た。そして、春か夏か、或は秋の日に再び東北を訪ねて見たい心でいつぱいである。（一九三三、一、一三）

大江戸から

岳人生

五月雨が頭から拔け切らない七月、河童が陸へ上つた樣に農林省入りをした。入ると直ぐ千曲會諸兄熟知の新庄氏が、同窓が一人增したから僕の農林省便りも追加せにやいかん、しかし僕の農林省便りも書直しても良い時分だから、君一つ自己紹介方々書いてはどうかとの事だつた。其時は樣子も不案内だつたので、それに第一新庄氏の樣に圓滑にはとても書けないと云ふ自信があつたので止めにして置た。然し自分は決して先輩の言をオロソカにしたんぢや無い。其後幾度か書かふとはしたけれど、煤煙臭い油の煮えたぎつた樣な、感激の無い都會の空の下じやとても筆はとれなかつた。其の日、其の日が全く車輪の樣だつた。仕事へよりむしろ役所的アトモスフェアに順應するために。

仕事は十月以降九時三十六分に始る。實は九時に始る規定なんだが何時の世からか、こうなつて居る。聞けば出勤簿が九時から九時半まで出て居る關係から來て居るのだそうで、それにしても三十六分は一寸解せない刻みである。一人の說明に依れば省の門着が丁度半なら、それで立派な出勤なんであるが門から各課に依つて距離が異る。この不公平を除くために設けられたのが五分と言ふ刻みである。そこで各人各々自己の課に三十五分に着たとしても先着が幾人もあつた時はどうするか、又先着が無いとしたつて例へ「押す」と云ふ一動作だつてこれを物理的に見れば時間の經過無しでは出來ない故に其所に一分を設けたのだと云ふ。一寸想像の出來無い別世界ではある。

自分も世の多くの人々のそれの如くに初めは八時半と云へば八時に出勤したんだが、もう此頃は三十分乃至三十六分で途中で美人に會つても振向く事も出來無い。改札口で定期券を示すべく一秒も立止る事も出來ない。交叉點では例へ自動車に突當らふとも唯進む一手あるのみである。

千曲東京支部は農林省で更に一分科を作る。現在自分共八人で、技師二名、技手四名、雇二名でこの雇の末席を自分が穢して居る。規定に依つてこの八人は毎月懇親會兼競技會を開く。それを略稱して月例會と云ふ並々ならぬ會である。即ち競技會とは技を競ふのであつて、技とは即ち心のうさを捨てる方法である。壯若入交りたる妙味至極の會である。實際これが唯一の樂みである。但し自分個人としての話。奥さんのある方やそれに近似値を有する人のある方は別として。同じ部屋に居ても平生はそう話は出來ぬ。先輩にダヽを捏ねるのはこの時である。

學生時代にやる會は好く行つて三次會まで、大低が二次會が落ちである。三次會とは言ふが、それはコールドウォーターかコーヒーでやる。朝霜の樣なもんだが省の月例會はそんな頼り無いんぢやない。二次、三次は豫算にある。豫算は無くとも計劃にある。自分が文無しでも、幹事が居る。實に安心の極みである。月例會と言つても時と場所を定めぬ。集つてから定める。これが又實に好い。灰白の都會で味ふ事の出來る南歐の澄み切つた空の下を漂泊するジプシーの境である。

銀座へ圓タクをトバス。正氣で聞いても心持の良い語である。これを醉歩漫散として、腰力座りたる時、聞くのは又格別である。自分としては「銀座」と云ふよりは「トバス」と云ふ事が良い。カットバス、ナグリトバス。ハリトバス。皆此類である。一次會は主に燃料の積載が行われる。二次會は銀座へ行く。三次會は、と言ひ度いけれど未だ一度も覺えて居た事が無い。不名譽乍らアバカずに濟む。不幸中の幸ひである。

銀座の地理は複雜である。これに精通するには莫大の資本と勞力と月日を要する。だから銀座通は閑人で金持である。これが不良老年の多い所以である。

月例會は何所へでも行く。圓タクと同じである。書けば際限が無い。十を三で割る樣なもんである。次の會話で月例會を終る。

A氏「あゝ好い氣持になつた
B氏「何所かへ出張じやふ
C氏「好いとこあるかい
D氏「A氏にたよれば良いさ
E氏「行くにしやう
F氏「この前のとこかい
G　「ありやいかん
A氏「眞田幸村を紹介しやふ
一同「えゝ
　サテ或るサロンである。
A氏「マダム
マダム氏「はい
A氏「紹介する。皆な上田の住民で昔なら家來である
マダム氏「まア皆樣上田でいらつしやいますの
A氏「そうさ　僕は眞田幸村、その次が三好青海入道、その次が猿飛佐助その次が霧隱才藏。好い男だらふ
マダム氏「まあ御冗談でせう
　サテ歸途である（あるサロンでマダムにもてた事勿論である）
B氏「あのマダム上田かい
A氏「そうさ上田だよ
一同「東京に居る奴は皆な故郷が懷しいんだ

書きついでだから仕事の方を一つ

御大田中技師は例の補償法。その下に新庄、武居技手が頑張つて生絲販路擴張。曰く絹製ズロース。曰く絹製肌着。是皆御婦人用許りである。上野技師が今度の製絲業法。小生がその膝下でこれて居る。中島技手が生絲檢査所の方で度々電話口で催促して居られる。曰く月報が遲い。曰く要項不備である。富岡技手及大塚氏が乾繭倉庫で活躍。

前後するが八人の中獨身が四人、その中誰が誰と昇天するか分らぬが今の所四對四である。くどい樣だが後の四人は晴

天（諸君、晴天なら太陽が出て、影が出來ますよ）である。

東京に居るに、夜毎々々の夢に高原のメロデーが特に月夜の信濃路が誘ふ。澄み切つた空！　若草の原！　白銀の峰！

センチにならね中にこれでサイナ

熊本千曲會近況

昭和七年も正に暮れなんとする時、當熊本千曲會長田浦準氏が故郷の土を離れて島根縣農林技師に榮轉されることになり、新年早々出發せらるゝにつき會員一同の送別會を正月三日熊本市砂取の東濱屋に開き名殘を惜んだ。

田浦氏は熊本千曲會の育ての親で、益々會の發展に關して盡力せられつゝあつた際でもあるから氏の轉任は非常に惜しまれたが榮轉とあらば是非もあるまい。

午後四時半開會太田慎一郎氏より送別の辭あり、其後田浦氏の謝辭ありて、後任會長推擧にうつり全會一致にて父母仙藏氏を會長に推戴し送別宴にうつつた。

尚本會の事務所は交通、地勢及事務處理の都合上熊本市外健軍村農林省蠶業試驗場内に置き事務に關しては主として太田慎一郎氏が處理せらるゝことに決定せる故本會に關して用務等のある場合は同氏宛御照會せられたい。

送別會出席會員は左の諸氏であつた。父母仙藏氏、松岡道也氏、太田慎一郎氏、高橋安雄氏、中島文雄氏、相澤仲司氏、深迫明氏、小川春男氏、原井國男氏、小林重男、（寒氣烈しけれど早梅咲きこぼれる一月廿五日小林記す）

通信

東海千曲會總會

拜啓愈々歳末と相成り御繁用の御事と拜察仕候

陳者先般鳳來寺に於て開催仕候當支部總會狀況早速御報申すべき筈の處雜務に追はれ今日迄遲延を重ね失禮の段何卒御容赦被下度候既報の豫定により本月三日開催針塚名譽會長殿無據處御事情のため御臨席の榮を得ざりしは甚遺憾に候ひしも幸蒲生理事殿の御臨席を得出席會員二十三名未だなき多數にて盛會裡に終了仕候先づ野澤會長開會を宣し中根會員より會務報告あり會長指名にて稲石佐一君議長席につき協議會に入り

一、三重支部獨立に關する件

寫眞說明（東海千曲會總會）

上段右より　鈴木錬一、戸倉八峯、高尾歳次、中根眞一、大著政平、松平一二、宮本靜雄

中段右より　齋藤舍、高田茂重郎、稲石佐一、平野秀男、近藤五代次

下段右より　芝荒雄、大石卓壽、工藤一二三、蒲生俊興、野澤泰治、吉野建吉、篠田平三郎、大久保秀治郎、中津信一郎

篠田三重縣幹事より說明あり可決

二、久保田前會長慰勞に關する件

記念品を贈呈することに決定

三、會則一部變更に關する件

a、三重支部獨立により三重縣在住者を除く件

b、支部會費徵收に關する件

原案通り可決

四、代議員選擧

重任に決定

次いで芝代議員より第六回代議員會狀況報告、蒲生理事殿の母校並千曲會近況報告あり午後八時より懇親會に移り申候

尚參考迄に現在役員氏名を示せば左の如くに候

一、會　長　野澤　泰　治（愛知）

一、幹　事　高尾　歳　次（同　）

今村　良　郷（同　）

高田茂重郎（靜岡）

味知　廉　三（同　）

後藤　宰　一（岐阜）

小林　茂　樹（同　）

大籠　政　平（靜岡）

芝　荒　雄（愛知）

上原　清　夫（岐阜）

一、代議員

二、伸

出席會員全部より左記成る可く早く實現相成樣希望有之候間申添候

一、本部に專任事務員を設置されたき事

一、本支部連絡を緊密ならしむるため本部豫算に出張旅費を計上され度こと

以上

（昭和七年十二月廿五日より東海千曲會長より千曲會理事長宛）

千曲會日誌

十二月三日　東海千曲會は愛知縣寶來寺に於て總會を開催し本會より蒲生理事出席母校並に本會の近況を報告せり。

十二月十六日　熊本千曲會の事務は從來會長宅に於て處理せられたるも會長田浦準氏の都合により熊本市外健軍村神水農林省蠶業試驗場態本出張所内に事務所を置き太田慎一郎氏が會長代理として執務する旨通知ありたり。

十二月十七日　上田公園富貴に於て例年の通り在田千曲會員が相集り忘年會兼懇親會を開催せり。當日の出席者松村理事長以下四十八名午後六時開會水入らずの懇談をなし最も盛會裡に本會の萬歳を三唱して午後八時散會せり。

十二月二十日　校友會雜誌第二十四號一部各支部長へ發送せり。

十二月二十八日　京都府綾部町郷是製絲株式會社坂締役故大城鎭氏の告別式に本會より林理事出張哀悼の意を表せり。

一月十六日　本會澤田英三郎氏は（絲十六）一月十一日逝逝せられたる旨母校へ通知ありたるを以て遺族に對し速時弔慰文を發信し又兩毛支部長へ其の旨通牒せり。

一月十九日　曩に有志各位より送附せられし弔慰金故田中恭二氏分金二十圓、故矢島孝雄氏分金十圓、故土田六衛氏分金四圓、故神林正一氏分金三十六圓　十錢右何れも遺族宛發送せり。

一月二十三日　本會々員松浦清氏（蠶選十）一月二十一日逝逝せられたる旨久保田正樹石附文吾の兩君より通知ありたるを以て直に弔電を發し尚松浦氏に多大の御同情をよせられし三榮社及一代雜種普及團に對して厚く御芳志を謝せり。尚安筑支部長へは其の旨通牒せり。

一月三十一日　熊本千曲會長田浦準氏曩に島根縣へ榮轉せられたるを以て其の後任に父母仙藏氏（熊本縣宇土郡不知火製絲會社）就任せらる。事務所は都合上太田慎一郎氏の許に置き主として同氏が執務せらるゝ旨通知ありたり。

准會員入會者氏名

千曲會規程一部改正に伴ひ、新たに准會員として入會せられたる會員氏名左記の如し。

（計六十四名順序不同）

田中製絲株式會社（長野縣小縣郡縣村）　安達たか
岡崎製絲株式會社（愛知縣岡崎市）　伊藤はる
會陽製絲株式會社（福島縣耶麻郡喜多方町）　市川乙女
㊇宮坂製絲場（長野縣諏訪郡平野村小井川）　市川すめ
八幡製絲場（滋賀縣追江八幡驛前）　市川みつい
長野縣上田市常入　梅田幸枝
五島製絲場（三重縣三重郡大矢知村）　大澁すみ
龍上製絲株式會社（長野縣諏訪郡平野村）　大槻まき
長野縣上田市新田　岡宮靜子
五島製絲場（三重縣三重郡大矢知村）　掛川泰子
長野縣神科村古里一三二〇　川上連
宮城縣長町南町四〇　木下とき
山口縣佐波郡西浦村女山　倉重梅野
神戸紡機株式會社（神戸市脇濱町一丁目）　倉島ちゑ
札幌市南四條西十四丁　倉田照子
昭榮製絲株式會社二日市工場（福岡縣筑紫郡）　栗山トリ
日東製絲株式會社都ノ城工場（宮崎縣）　小池武子
山下製絲場（靜岡縣富士郡大宮町）　兒玉孝
日東製絲株式會社都ノ城工場（宮崎縣）　兒玉光子
同　小林ゞ代

弔慰金募集廣告

本會々員
松浦清氏（蠶選十）
澤田英三郎氏（絲十六）
豫而御病氣の處養生不相叶松浦氏は一月二十一日澤田氏は一月十一日遂に御逝去被致候間此段本紙上を以て及御通知候也
追而有志弔慰金は來る三月末日迄に取纏め遺族へ贈呈可致候間便宜上振替口座東京第四三三四一番へ松浦氏又は澤田氏弔慰金の旨夫々御明記の上御拂込被下度候

昭和八年二月十五日
上田蠶絲專門學校
千曲會

三井物産株式會社生絲部（神戸市海岸通三丁目）　小林つね
塩原製絲場（長野縣諏訪郡上諏訪町）　小山まさみ
山形縣北村山郡東根町原方　澁谷まさ江
木會川製絲場（愛知縣葉栗郡木會川町）　笹川ヨキ子
長野縣上田市新參町五五一五　島田玉子
恒川スヾ
昭榮製絲株式會社新町工場（群馬縣多野郡新町）　長岡あさ
碓氷社（群馬縣高崎市飯塚）　中澤利子
和田商事株式會社（福島縣伊達郡湯野村）　中村ふみ
郡是製絲株式會社美濃工場（岐阜縣加茂郡古井町）　橋本きぬ子
山下製絲場（靜岡縣富士郡大宮町）　橋本あい
五島製絲場（三重縣三重郡大矢知村）　長谷川美術喜
繭格付檢定所（奈良縣高市郡八木町）　半田ひさ
和歌山縣那賀郡毛原宮　古谷かな枝
岡本製絲場（愛知縣碧海郡知立町）　堀内波
横濱市本牧町矢二五〇〇　松尾房子
㊇廣文館（群馬縣多野郡新町驛前）　丸茂まさ江
日東製絲株式會社都ノ城工場（宮崎縣）　宮澤いち
小口組製絲會社加茂名工場（德島縣名東郡）　宮島はる
三重製絲株式會社（三重縣三重郡三重村）　森ふじい
常田館（長野縣上田市）　森田すい
㊀增澤商店（長野縣諏訪郡岡谷）　柳澤喜代子
日東製絲株式會社都ノ城工場（宮崎縣）　柳澤みや
同　柳澤よし子
五島製絲場（三重縣三重郡大矢知村）　吉川小新
㊇生絲組合（長野縣諏訪郡上諏訪町大和）　吉口春子
上田蠶絲專門學校　茨木こう
同　瀧野たき
同　山越さと
同　瀧澤もとえ
同　牧野久
長野縣小縣郡東鹽田村柳澤　關田艶子
上田市御所　田玉豐子
上田市緑町　宮原みよし
長野縣小縣郡丸子町　土屋ひで
武石製絲所（長野縣小縣郡武石村）　岡澤重
諏訪郡宮川村安國寺　小池りん
海南繭絲販賣組合（高知縣吾川郡弘岡上ノ村）　松本まさ
上田市常入町小林清丸方　一ノ瀬信子
長野縣小縣郡丸子町字腰越五七七　山田かなめ
長野縣小縣郡滋野村一五八　高橋よし江
東京市中野區中野町桃園四五　竹内ぢやう
下伊那郡川路村川路信用販賣組合　北原かつ
東京市荒川區三河島町一丁目二七七四　安田けい
福島市五十邊大字塚間五　片岡まさ
長野縣小縣郡丸子町五丁目（警察官舍）　清水雪
東京市芝區田村町八番地　熊倉和子
日東製絲株式會社岐阜工場市川　みす
綿久製絲場（新潟縣長岡市宮原町）　布施とよ

謹啓
時下餘寒の候各位益々御清祥の段奉賀候
陳者小生等去る二月一日左記に入隊仕候間今後共從前通りよろしく御鞭達の程願上候
先は不取敢誌上を以て御挨拶申述度如斯に御座候

水戸市工兵第十四大隊留守隊第三中隊
幹部候補生
丸山力藏
白川孝昌
池内眞吾

住所移動

鶴田定平　蠶一　長野縣廳蠶絲課（長野市）
唐澤正平　蠶二　鐘紡營業部蠶業課（神戸市林田區御崎町一）（訂）
（自宅神戸市須磨區行幸町四丁目三五番屋敷須磨離宮道消防置北隣）
岸　勝彌　蠶三　靜岡縣廳蠶絲課（靜岡市）
田中康雄　蠶四　原蘇移動（長野縣小縣郡本原村二〇二）
曾山直高　蠶四　下高井農學校（長野縣中野町）
天田晉三郎　蠶五　松任農學校（石川縣松任町）
丸山武夫　蠶五　新潟縣蠶業試驗場（新潟縣五泉町）（訂）
金　昌漢　選蠶七　醴泉郡廳（朝鮮慶尙北道）
佐藤義助　選蠶十一　藤本蠶業株式會社土浦支店（茨城縣新治郡眞鍋町）（訂）
金子幸一　選蠶十三　片倉製糸紡績株式會社須坂田中製絲所（長野縣須坂町）
氏家忠次　選蠶十四　郡是製絲工場（福嶋縣桑折町）
川上與三郎　選蠶十五　高知縣蠶業取締所美良布支所（香美郡美良布村）
山本傳市　蠶十六　羽島郡聯合事務所（岐阜縣笠松町）
內苑駿吉　蠶十六　日東製絲株式會社熊本出張所（熊本市九品寺町）
宮堀俊雄　蠶十七　長野縣蠶業取締所飯田支所（飯田町）
朴　炳禧　蠶十七　平北寧邊公立農業學校（朝鮮平安北道）
太田　元　蠶十八　長野縣小縣郡神川村
若林爲夫　蠶十八　農林省蠶業試驗場（東京市杉並區杉並町）
河田榮一　蠶十八　本校蠶業科
宮澤　岬　蠶十九　舊姓石會根（郡是製絲二日市乾燥物（福岡縣二日市町）
池內眞吾　蠶十九　水戸工兵第十四大隊第三中隊幹部候補生
梶田　陞　蠶十九　姫路第三十九聯隊留守隊第二中隊幹部候補生
加藤省三　蠶十九　弘崎步兵三十一聯隊留守隊第一中隊幹部候補生
白川孝昌　蠶十九　水戸工兵第十四大隊第三中隊幹部候補生
武田一好　蠶十九　近衛步兵第二聯隊第十一中隊幹部候補生（東京市麴町區代官町）
高田茂重郎　絲一　日本絹織株式會社（大阪市西區江戸堀上通一ノ一六）
田浦　準　絲二　島根縣廳農務課（松江市）
矢田部忠吉　糸二　横濱市中區根岸町仲田三、九三九
甲斐　孜　絲二　薩摩製絲株式會社志布志工場（熊本縣志布志町）
甲斐　肇　絲二　郡是製絲株式會社益田工場（嶋根縣益田町）
神保喜久　絲三　郡是製絲株式會社宇島工場（福島縣宇島町）
石坂虎治郎　絲五　鐘紡營業部（神戸市林田區御崎町一丁目）
味澤泰造　絲五　埼玉縣大宮町土手宿金井方
坂口良吉　絲五　鳥取縣米子市西町
佐藤金六　絲五　筒井製絲株式會社（德島縣鴨島町）
蟹江優　絲七　東京市大森區新井宿六丁目七一三
富田庄三郎　絲八　鐘紡福島第二工場（福島縣信夫郡野田村大字笹木野）
大野久藏　絲八　大森蠶絲化學研究所（東京市大森區入新井三丁目一、四三五）（訂）
佐藤與四次　絲八　神戸市林田區吉田町一丁目鐘紡社宅
黑田誠一郎　選絲八　金澤倉庫精練株式會社（金澤市長町）（自宅金澤市早道町九）
本山正美　絲九　片倉製絲紡績株式會社（朝鮮京城西大門外）
小山田道男　選絲十　甘樂社（群馬縣富岡町）
原　利直　絲十一　長野縣上伊那郡西箕輪村
合田信一　絲十一　片倉製絲紡績株式會社石原製絲団製絲場（埼玉縣熊谷町）
柳澤忠治　絲十一　昭榮製絲株式會社小山工場（栃木縣小山町）
塩田健介　絲十一　豐中生絲株式會社中津工場（大分縣中津市）
中岡　固　絲十二　愛媛縣廳蠶絲課（松山市）
横山英一　絲十二　昭榮製絲株式會社本庄工場（埼玉縣本庄町）
望月榮作　絲十三　鐘紡大淀製絲工場
倉澤榮太郎　絲十四　片倉製絲紡績株式會社講習所（埼玉縣大宮町）
堀久三郎　絲十四　鐘紡更生絹糸工場（神戸市林田區小松通五丁目）
笠原　豊　絲十五　茨城縣廳蠶絲課（水戸市）
角替甚夫　選絲十五　片倉能登舟製絲所（長野縣諏訪郡川岸村）
神津輝人　絲十六　佐渡製絲所（德島縣鴨島町）
竹內萬二郎　絲十六　山口縣廳農務課（山口市）
杉山一雄　絲十六　三井物產株式會社生絲部（横濱市中區日本大通）（訂）
徐　晋鐘　選絲十六　中華民國浙江省吳興縣政府建設課
安本武一郎　選絲十六　大阪洋傘同業組合（大阪市東區唐物町五ノ一三）
高橋　滿　絲十七　若林製絲場（福嶋縣浪江町）
宇根山哲夫　絲十七　德島縣廳農林課（德島市）
宮崎　連　絲十六　大分縣廳農務課（大分市）
程　振夏　選絲十七　無錫乾生絲廠（中華民國上海行無錫）
飯濱　榮　絲十八　新綾部製絲株式會社木津工場（京都府木津町）
松井憲二　絲十八　岐阜縣廳蠶絲課（岐阜市）
馬場　武　絲十八　片倉備作製絲株式會社（岡山市上伊福）（訂）
千葉達人　絲十六　群是製絲株式會社長井工場（山形縣長井町）
高松珍夫　絲十八　郡馬社（前橋市外元總社村）
根津　建　絲十八　若林製絲小川工場（熊本縣下益城郡小川驛前）
山田良人　絲十八　新綾部製絲株式會社（京都府綾部町）
福島喜藏　絲十八　群馬縣群馬郡金島村祖母島
酒井淳夫　絲十八　神戸生絲檢査所（神戸市濱邊通八）
宮崎忠祥　絲十八　德永と改姓
宮下幸三　絲十九　片倉製絲丸二製絲所（長野縣諏訪郡平野村）
井上熊保　絲十九　筒井製絲株式會社（德島縣鴨嶋町）
小關悅郎　絲十九　昭榮製絲新町工場（群馬縣新町）
田中四郎　絲十九　東京府廳農林課（東京市麴町區大手町）
瀧澤幸司　絲十九　各務原飛行第一聯隊第二中隊（岐阜縣）
大石唯男　絲十九　野戰重砲兵第一聯隊第二中隊幹部候補生（千葉縣市川町）
梅村義一　絲十九　野戰重砲兵第二聯隊第一中隊幹部候補生（靜岡縣三島町）
櫻井隆夫　紡四　本校絹絲紡績科
吉田六郎　紡五　淸水と改姓
橋本和夫　紡六　岐阜丸木商會神戸支店（神戸市三宮町一丁目一七五ノ二）
小林尙一　紡八　新潟縣中頸城郡泉村一〇二八
品川末夫　紡九　商工省神戸輸出絹織物檢査所（神戸市林田區一番町四丁目）
小林忠十郎　紡十　原名古屋製絲所（名古屋市西區田幡町）
中村治三郎　紡十　長崎紡織株式會社青島工場（中華民國青島市外滄口）
柳澤信義　紡十　雄氷社高崎工場（高崎市北高崎）
中森謹二　紡十一　近江絹絲株式會社（滋賀縣彦根町）
保々鐵三　選紡十一　三夜莊（京都市伏見區桃山）（訂）
丸山力三　紡十一　水戸工兵第十四大隊第三中隊幹部候補生
松浦　淸　選蠶十　死亡
澤田英三郎　絲十六　死亡

編輯室より

年賀廣告の都合で本年一月號は昨年の大晦日に發送した爲めに年末には馬鹿に急がしかつたが而しお正月はお蔭で編輯室も極めて閑散でありました。編輯子が時報の編輯を御引受けする際に一番心配でありました事は原稿の不足と云ふ點でありました。然るにそう案じたものでなくお引受けしてからは原稿は以前よりも追々增加の傾向でどうやら每月豫定の八頁を塡ぐ事が出來ました事は是れ偏に各位の厚き御同情によるものと深く感謝いたします。

今月は特に原稿が多かつた爲めに八頁を十頁に改め且つ全文を六號活字に組みました。少しは讀みにくいかも知れませんが御寄せ下されました原稿は成るべく全部登載いたしかつたからです。

× ×

第六回代議員會に於て千曲會の會則中に準會員の制度を設くる事が可決せられた事は別項（議事錄）の如くであるが準會員は千曲會の會員名簿と千曲時報との配布を受ける事となりそれが爲め一月號よりは千曲時報の發行部數を百部增加して千四百五十部と致しました。